

舞踊作品の分析的研究（第5報）

— 中学生におけるフレーズ創作の分析 —

儀 島 紘 子

I はじめに

舞踊は人間の身体そのものを素材として、イメージを運動という現象におきかえ、作者の経験した感動を乗せ、観者に動きを通して伝達していくものである。原始時代に自己の意思を伝達し、感情を表現する手段として舞踊が発生して以来、歴史の流れの中で人間は舞踊を楽しみ芸術として発展させてきた。現在、我が国においても多種多様の舞踊が存在しているが、学校教育の場においては、戦後文部省学習指導要領試案が出されて以来、体育教科におけるダンスの領域では、創作ダンス（表現）とフォークダンスが2本の柱として指導されてきたのである。そして昭和52年7月に新学習指導要領が示され、さらに創作、表現中心の舞踊教育にと目標の方向が定められた。しかし、この新指導要領におけるダンスの内容も、過去30年余の積み重ねの上に立って精選された内容であろうが、示された基準に沿っての現場の教師の創意工夫ある運用に委ねられたものであり、生徒の発達段階に合った具体的な内容と教材の配列とが明示されていないように思われる。そこで、舞踊教育に携わる者に課せられた問題として、新学習指導要領に示された数少ない指標の枠の中で、最大限教え得るものは何かを探り、生徒の可能性を十分に伸ばす方法論を見出すことが急務である。そのためには、生徒個人個人の発達や経験などの実態を知り、ダンスの本質、特性をふまえた指導方法を体系化する必要がある。

このことから、筆者らは舞踊そのものの全体構造を明らかにし、幼児から大学生までの実際の指導の場に合った具体的な内容を設定し、系統的に配列することを目的として研究を続けてきた。このうち、筆者は舞踊創作において必要と考えられる要因を明確にし、それらの要因が創作過程において、どのように機能しているかを把握するために実験を行ない、対象個々の創作過程および舞踊作品を分析することにより、舞踊を構成する要因の把握のされ方を年令別にとらえ、その配列、結合の様相を報告してきた。そして前報では、創作過程において自己変革のみられた中学生、高校生、大学生を対象として、要因の認識の度合いを探り、舞踊作品に有効に機能している要因を確かめた。そこで今回は、さらに、新学習指導要領において、小学校3年生から中学生までの表現運動、ダンス領域における指導内容として段階的に配列されている11項目の「動きの感じ」をイメージとして、それを生徒がどのようにとらえ、どのような表現運動として表わすかを知り、前報までの結果の確かめと、新学習指導要領におけるダンス領域の内容配列の妥当性を検討しようとするものである。

II 研究の方法

1. 期間および対象

期間 昭和53年6月

対象 都窪郡早島町早島中学校2年女子45名

2. 実験方法

- (1) 昭和52年7月改訂の文部省学習指導要領保健体育の表現運動、ダンス領域において、小学校3年から中学校までの内容として配列されている11項目の「動きの感じ」（表1に示す）を与え、連想される題材名を連記させ、動きのイメージの浮かびやすい項目を3項目

11項目中、連想された題材の種類数、頻数が多くみられたのは、「軽くて柔らかい感じ」、「激しい感じ」、「鋭い感じ」、「楽しく軽やかでなめらかな感じ」である。項目中かなり多く頻数がみられた題材名は、「軽くて柔らかい感じ」では雲(20)、綿(16)、「力が急に爆発する感じ」では火山の噴火(23)、「激しい感じ」では嵐(22)で、それらは各々の感じからの代表的な題材例とすることができよう。各項目別にとらえた題材の範囲をみると、「軽くて柔らかい感じ」、「楽しく軽やかでなめらかな感じ」は自然現象から多くとらえ、植物、動物からもとらえている。「対応した動きの感じ」は生活事象からが多く生活感情からもとらえている。「重くて柔らかい感じ」は自然現象、生活事象、生活感情、動物などの広い範囲からとらえている。「力が急に爆発する感じ」、「対立する感じ」、「激しく対立する感じ」は自然現象、生活事象、生活感情からとらえている。「激しい感じ」からの題材はほとんどが自然現象であり、「力強く作業が進行する感じ」は生活事象がほとんどである。「鋭い感じ」は鉱物が多く、自然現象、動物からとらえた題材もみられる。「力強くまとまって活動する感じ」は生活感情、生活事象の範囲からとらえている。

次に11項目の動きの感じの語の中から、実際に動きのイメージの浮かぶものを3項目選択させ、また、その中からさらに、もっとも表現しやすいと思われるものを1項目選択した頻数を示したのが表2である。

表2 表現したい感じを選択した頻数



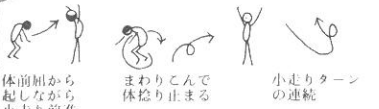



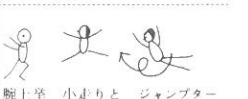


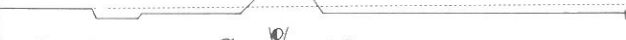





	項 目	動きのイメージを浮べた項目 (選択3題)	実際に表現した項目 (選択1題)
1	軽くて柔らかい感じ	18	0
2	対応した動きの感じ	6	0
3	重くて柔らかい感じ	2	4
4	力が急に爆発する感じ	20	12
5	激しい感じ	25	13
6	力強く作業が進行する感じ	3	0
7	鋭い感じ	2	0
8	対立する感じ	1	0
9	楽しく軽やかでなめらかな感じ	13	4
10	激しく対立する感じ	4	0
11	力強くまとまって活動する感じ	3	0
	計	97	33

3項目選択した中では、「激しい感じ」がもっとも多く、続いて「力が急に爆発する感じ」、「軽くて柔らかい感じ」、「楽しく軽やかでなめらかな感じ」であった。学習指導要領(中学校)にあげられている項目と対照すると、「楽しく軽やかでなめらかな感じ」については中学校の段

階で取り上げる表現の課題として、実態からも妥当である結果が得られたが、指導要領にあげられている他の「激しく対立する感じ」、「力強くまとまって活動する感じ」の2項目については、わずかな頻数の選択しかみられず、これらは個人の創作という実験の条件から動きのイメージが浮かびにくい項目であると思われる。

次に、実験(2)において、3項目の中からさらに1項目のみもっとも表現しやすいものを選択させた結果、「激しい感じ」、「力が急に爆発する感じ」の2項目に頻数が集中した。この2項目については、イメージのみで選択した項目と一致し、頭の中に浮かべたイメージを実際に動きに移しやすい項目と思われる。3項目選択した中で頻数の多かった「軽くて柔らかい感じ」は実際に表現に移す段階では全く選択されず、イメージとしては浮かびやすいが動きへの転換がすぐにはできなかったものと思われる。「重くて柔らかい感じ」は頻数としては少ないが動きに移しやすい項目として得られた。また実験(2)において選択された項目について1例ずつ、実際の動きの構成を図1に示した。

図1 フレーズの構成(動作分析…事例)

表現内容	動き、リズム、空間の構成	フレーズの長さ	フロアーパターン
<p>激しい感じ</p> <p>激しい嵐が村をおそって津波が人家をのみこみ、木が倒れる。嵐もやみまた、平和がやってきた。</p>	<p>(動きのリズム)</p>  <p>(高低の変化)</p>  <p>(主な動き)</p>  <p>体前屈から起しながら小走り前進 まわりこんで体捻り止まる 小走りターンの連続</p>	(22秒)	 <p>S F</p>
<p>力が急に爆発する感じ</p> <p>だんだんと怒りを向うへ押ししていくような、怒りが盛り上がるような感じ</p>	<p>(動きのリズム)</p>  <p>(高低の変化)</p>  <p>(主な動き)</p>  <p>腕上半伸びる 小走りで大ジャンプ ジャンプターンと走って大ジャンプ2回</p>	(13秒)	 <p>S F</p>
<p>重くて柔らかい感じ</p> <p>ぐにゃぐにゃと、たこのような感じで、ヨガをするような感じ</p>	<p>(動きのリズム)</p>  <p>(高低の変化)</p>  <p>(主な動き)</p>  <p>片膝つき前屈腕回旋し開く 仰臥し片腕交互回旋 立ってその場でゆっくりターンし坐る 坐って腕回旋 膝つき体前屈のポーズ</p>	(37秒)	<p>その場のみ</p> <p>S (F)</p>
<p>楽しく軽やかな感じ</p> <p>小川の流れるような感じ</p>	<p>(動きのリズム)</p>  <p>(高低の変化)</p>  <p>(主な動き)</p>  <p>腕上半回旋しウォーク、ギャロップの反復 片脚振り上げ 屈膝でターン ギャロップしターン 腕左右に振りウォーク前進 ターン 小走りしふみかえとび 小走りウォークで前進</p>	(48秒)	 <p>S F</p>

(注) 動きははじめ……S 終り……F

実験(3)より得た個人個人の実際の動きを図1のように記録分析し、各項目ごとに動きのイメージ、主な動き、リズム、空間構成についての分析結果を表3に示した。

項目ごとに主な傾向をみると、

(1) 軽くて柔らかい感じ

主に腕と脚の動きで♪、♪などの軽快なリズムで小走り、フォロー、ジャンプなど空間を大きく移動した動きである。

(2) 対応した動きの感じ

2人で相手と対応し離れたり近づいたりして主に小走り、その場での立つ、しゃがむの反復の動きであり、空間も2人での高低変化による対応が主である。

(3) 重くて柔らかい感じ

ほとんど移動せず、その場の低い姿勢での胴体中心の動きでゆっくりした♪、○のリズムを使った体前屈、側屈、捻転、回旋などの動きである。

(4) 力が急に爆発する感じ

小さくなって小走から急激なジャンプ、瞬間的に腕を振り上げジャンプの連続など、主にジャンプを多く使っている。腕、体、脚のリズムは同じリズムでアクセントをつけた♪のリズム、空間は小刻みに高、中、低と変化をし左右の横への移動が主である。

(5) 激しい感じ

不規則なリズムで脚、腕、体による複合リズムでの小走りターン、急激なジャンプ、アクセントのある腕上下、回旋などの強い動きが多く、空間は主に前後、左右の直線的移動である。

(6) 力強く作業が進行する感じ

アクセントのある♪、♪、♪などの規則的なリズムで腕を強く屈伸し前進ウォーク、走るなどの力を前に押し出すような動きであり、前向きでのその場と前後の直線的な移動が主である。

(7) 鋭い感じ

腕による動きが主で、♪の規則的なリズムの反復により腕を上突き上げたその場のみの動きであり、空間の移動はほとんどしていない。

(8) 対立する感じ

2人で両側から肘を屈げ前に押しながらウォーク、ジャンプでの前進が主で、腕と脚による♪、♪の規則的なリズムの反復であり、横向きでの左右の直線的移動のみである。

(9) 楽しく軽やかでなめらかな感じ

腕をやわらかく使い腕上下、回旋しながら小走り、ターン、ジャンプなどの動きで腕と脚による複合リズムで、主に脚は♪のシンコペーションのリズムであり、空間はほとんど高い姿勢での直線的移動と曲線的移動の組み合わせである。

(10) 激しく対立する感じ

2人で向い合って小走り前進から急激なジャンプ、体前倒でウォークなどの動きで主に脚による♪、♪などのリズムを使った速い動きであり、空間はほとんど高い位置で面の変化、移動の変化が多い。

(11) 力強くまとまって活動する感じ

動きの種類は少なくウォークが主な動きであり、腕、体、脚ともに同じ♪、♪の規則的な単一リズムの反復で、空間は高低、面の変化が多く主に曲線的移動である。

以上の11項目中から学習指導要領において、中学校の指導内容としてあげられている(9)(10)(11)の3項目について、実験の結果と文部省の中学校指導書¹⁾に解説されている内容と比較考察す

る。「楽しく軽やかでなめらかな感じ」の表現は指導書によると、規則的で速いリズムの動き軽やかでリズムカルな足どりや手ぶり、あるいは柔らかくなめらかな動きで表わし、それらの動きに応じた場所の使い方の工夫を例示しており、実際に生徒が浮かべた動きのイメージ、および表現分析の結果と大体一致したが、実態からは動きのリズムについてシンコーションのリズム、腕、脚による複合リズムなど、リズムの工夫がかなりなされていたようである。「激しく対立する感じ」の表現は指導書によると、相手と激しくぶつかり合う動き、ダイナミックなジャンプやターンの動き、じっと静止して相手をうかがう状態から急激にすばやく移動したり、その場で動きを変えるなど対立要素を生かしたアクセントのある全身的跳躍的な動きで、人や場所の使い方の工夫があげられているが、実態では、あまり対立要素を生かした表現の工夫がされず、題材を連想する時点ではイメージがふくらんでいても、実際の動きにおいてはうまく生かされていなかったようである。「力強くまとまって活動する感じ」の表現は指導書によると、規則的なリズムの反復の中で次第に力が強まっていく動きで表わし、内容を強調するように集団や場所の使い方を工夫するとあるが、今回の実験では個人での創作という条件からまとまって活動するという集団の感じが強調できず、イメージと表現が一致しなかったようである。このことから、「楽しく軽やかでなめらかな感じ」については指導書に示された内容とも一致するところであり、中学校期に与えるべきダンスの課題として適切であることが確かめられたが、「激しく対立する感じ」、「力強くまとまって活動する感じ」については、実験の条件とも考え合わせ今後検討せねばならない問題であろう。

Ⅳ ま と め

以上のことを、前報までに得た分析結果と比較しまとめる。前報まではテーマを与えての自由な発想であり、教授—学習過程において個人の思考を経た創作作品であることと、今回は改訂学習指導要領の内容に示された「動きの感じ」をイメージとして与えての個人の十分な思考を経していない表現運動であることの条件の違いはあるが、前報までの結果、すなわち、舞踊を構成する要因のうち、中学生の段階では動き、リズムの要因が重要な要因であることが、今回の結果からも確かめられた。このことから、中学生の創作ダンス指導においては、動き、リズムの面から接近していくことが望ましいと考えられる。今後はこのことを基として、さらに深く研究を進め、対象の発達段階に合った、実際の学習指導の場に生かされる具体的な指導内容を設定していきたい。

終りに本研究にご協力、ご指導いただいた西谷怜子教授ならびに荒木恵美子助教授に深く感謝の意を表します。

文 献 注

- 1) 文部省中学校指導書保健体育編 78～79頁(1978)

参考文献

- 磯島紘子 岡山県立短期大学研究紀要第22号(1978)
磯島紘子 岡山県立短期大学研究紀要第17号(1973)
中学校指導書 保健体育編 文部省(1978)
小学校指導書 体育編 文部省(1978)

昭和54年3月31日受理